

開催地名：大阪府忠岡町	
開催日時	令和2年2月2日（日） 10：00～12：00
開催場所	忠岡町ふれあいホール
語り部	吉田 亮一 （宮城県仙台市）
参加者	自主防災組織 約100名
開催経緯	地域において、防災資機材の購入や、台風接近時に集会所を避難所として開設する等、防災に対して積極的な取組を行っているが、今後の更なる地域の防災活動について明確な方向性が無い。また、各自自主防災組織で防災意識に温度差があるため、防災に関し積極的な活動ができていない組織がある。これらの課題の解消に向けて、語り部の講演からヒントを得たい。
内容	<p>（1）はじめに</p> <p>私は平成17年より町内会の班長を務め、地域防災に関する計画の立案を始めた。その後、平成18年に269世帯の町内会総括防災部長となってから進めた5年間にわたる地域防災に関する取組を説明したい。</p> <p>（2）防災の基本は「想定以上の備え」</p> <p>平成17年度まで、仙台市では訓練などの活動が一切行われていなかった。私が経営している保育園では、法律により月に一度の防災訓練が義務づけられている。保育園では独自の避難マニュアルがあったが、地域の指定避難所、小・中学校にその用意がなかった。そのことを危惧して、まずは市、県、自衛隊、気象台などあらゆる場所から情報を集めた。まさかと思うような異常気象や災害も、自然の一部であり、全て起こりうる現実である。だからこそ、想定以上の備えが必要となる。平成18年から、地域住民の方々には「想定外は言い訳」という言葉を伝えてきた。</p> <p>（3）平成18年から行われた5年間の活動</p> <p>私の町内会では、平成18年から5年計画を通じてあらゆる準備を進めた。まずは防災マップを作成した。これは地域が独自に行い、防災訓練や災害発生時用として活用した。次に防災マニュアルも、地域独自のものを作成した。この2つをセットにして、全世帯に配布した。市の補助金は利用せず、町内会費から防災費として徴収した。</p> <p>地域では消火班、救護班、救出班、避難誘導班、給食給水班、報告連絡班、警備班からなる自主防災組織を設立し、班長が一時避難所で災害状況を確認した後は、それぞれの役割を各班で分担して担うこととした。持ち回りのため、5、</p>

6年も経てばほとんどの世帯の人々が経験することになる。災害時にその班員がいなくても、経験者が担えるようになった。

また、定期的に行われた防災訓練では、働いている方を訓練のリーダーなどの役割には充てなかった。彼らは平日には地域におらず、土日も災害発生時は会社の復旧に追われるケースが多い。普段から自宅や地域にいる大人や高齢者、子どもたちが中心となって訓練を行った。

(4) 避難所での工夫

「O157対策」

ダンボールの上に直接座るのではなく、ブルーシートの下にダンボールを敷くようにする。嘔吐した方がいたら、新聞紙でブルーシート上の嘔吐物を取り除いた後、塩素系の洗剤でシートを拭く。ダンボールの上に直接嘔吐されると、ふき取る際に紙の繊維が飛び散ることで、菌が飛散する恐れがある。

「半島型避難スペース」

通常の設定方法の場合は、ただ単にブルーシートを敷いただけで終わりであるが、その場合は、外に出たり、食事をもらいに行ったり、トイレに行ったりするたびに、奥側にいる方々は人を跨ぐ必要がある。さらには誰もが入ってこれるという、防犯上の問題もある。そこで、ブルーシートを1枚当たり、2メートル×4メートル幅に切り、それらのシートの間隔を1メートルずつ開けて、人を跨がずにどこからでも出入りできるように体育館に配置する。体育館の両サイドの壁際には体育で使うマットを敷き、その上に跳び箱の一番上の段の部分の部分を置いて、足を伸ばして座れるスペースも確保した。このスペースは、特に高齢者の方々に好評であった。



開催地より

震災の体験や教訓について、非常に分かりやすくお話しいただいた。今後、自主防災会の取り組むべき課題がより明確になったと思う。